

# 演劇を用いた地域に開かれたカフェ型健康教室の開発と評価 ～多職種連携による糖尿病劇場の経験を踏まえて～

岡崎 研太郎 ●九州大学 大学院医学研究院 地域医療教育ユニット 助教



2009年第52回日本糖尿病学会年次学術集会における糖尿病劇場のワンシーン

## 1. 背景と目的

近年、認知症カフェなど、医療や健康をテーマとしたカフェ型の医療者・非医療者間コミュニケーションが盛んになってきた。背景には、医療者と非医療者が本音で語り合う場が求められている時流がある。クリニックや病院などの医療機関では、専門家と非専門家というヒエラルキーの存在が意識され、治療する者と受ける者という関係性が強固であり、互いに対等な立場で対話をするのは難しい。医療機関を離れてカフェという場を設定することにより、相互に人間として尊重し合い、率直な意見交換ができる可能性が高まると考えられる。

一方、我々はこれまで「糖尿病劇場」などの医療者が演じる劇を取り入れたワークショップを多職種連携の仕組みとして取り入れ、医療系学会や患者会等で数多く実施してきた。

しかし、認知症カフェに代表される健康カフェを多職種協働でどのように開催すればよいのかという具体的なプログラムづくりや実践についてのノウハウはあまり公開・共有されておらず、健康カフェの効果についてもあまり検討されていない。また、地域住民を対象とした健康教育に演劇を取り入れた例も少なく、実施の可能性や効果についてのデータ

はほとんどない。

本研究の目的は、演劇を用いた地域に開かれたカフェ型健康教室を開発、実施し、その効果を検討することである。

## 2. 取り組みの方法

「糖尿病劇場」等での経験を踏まえ、医療者による演劇を取り入れ、地域に開かれた形でカフェ型の健康教室を実施する。健康教室のテーマは、住民の関心が高いと想定される糖尿病、認知症、ポリファーマシー、終末期医療、新型コロナウイルス感染症などを想定している。健康教室の冒頭で、各回のテーマに即した劇を上演する。その後、カフェマスターという名のファシリテーターによる進行のもと、参加者の住民と医療者が語り合う。カフェ型健康教室に参加することで参加者のテーマに関する疑問を共有し、テーマに関する理解や認識を深めてもらうのが狙いである。

研究手法としては、参加者を対象とした質問紙調査やインタビューを実施し、量的研究・質的研究の両面から探索的に検討する混合研究法を用いる予定である。

## 3. 期待される成果

カフェ型健康教室への参加によって、参加者の健康テーマに関する知識や理解が深まるのではないかと、一方的な講義を聞く形式よりも満足度が高まるのではないかと考えている。さらに、こうした効果と参加者のヘルスリテラシーとの関連についても分析していく。本研究の結果は、多職種連携による地域住民へのヘルスプロモーションの手法を考えるうえで、重要な基礎的データを提供することになると考えられる。